

「チブ」に乗って川を行く

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



幕別町蝦夷文化考古館(まくべつちょうえぞぼんかこうこかん)に展示してある、実際に使われていたチブ(丸木舟)を補修したもの。1本の木からつくられる。

川で魚をとる時、また川を「道」として利用する時には、舟が使われました。

最も代表的な川舟は、「チブ(丸木舟)」です。

丸木舟というのは、太い木をけずり、くりぬくことで舟の形にしたものです。長さは6～7mくらいあります。

材料の木としては、オオバヤナギ(スス)、カツラ(ランコ)、ヤチダモ(ピンニ)、ハリギリ(アコシニ)、ミズナラ(ペロコムニ)、トドマツ(フツニ)、シナノキ(クペルケツニ)などが使われました。かなり太く、まっすぐな木でないと、チブづくりには使えません。

池などで実際に乗ってみると、意外なくらい安定しています。しばらく練習すれば、少しくらいなら、さおを使って動かすことができるかも知れません。(129ページ)



チブの先につけられた「イナウ(木をけずって作った祈りの道具)」。上士幌町・東泉園での「マレック漁の集い」。

チブをつくる時の祈り

川や海は、おそろしい自然でもあります。今でも、船を水にうかべる前には、世界中でさまざまな儀式がおこなわれています。

アイヌ文化では、材料の木を切る時からカムイ(神)に祈ります。山に入る前には、カムイノミ(カムイへの祈り)をおこないます。いい木が見つかったら、シリコロカムイ(土地のカムイ)にカムイノミをしてから切りたおし、大まかに舟の形にします。そして、切り株に「イナウ(カムイに語るための祈りの道具)」をささげて舟の安全を祈ってからコタン(集落)に運び、完成させます。

初めて舟を使う時には、イナウを舟のカムイにささげ、「チブサンケ」という儀式を行います。傷んで使えなくなった時にも、舟のカムイをカムイの国へ送る「イワクテ」という儀礼がおこなわれます。

(カムイ p134)

樹皮の舟や板張りの舟も

そのほか、木の幹ではなく、キハダ(シケレペニ)やエゾマツ(スルク)といった木の「皮」を使った「ヤラチナ」もつくられました。強くはありませんが、早くつくることができます。

山野で狩りをしてたくさんえものがとれた時など、コタンまで運ぶために使われたようです。

また、海でメカジキ、マンボウなどの魚をとったり、オットセイ、イルカなどをとる時、また、交易品を運ぶ時などには、「イタオマチブ」が使われました。イタオマチブは、丸木舟の横に波よけの板をはりつけ、ブドウづるのロープやクジラのヒゲなどで、つづり合わせたものです。



海で使われたイタオマチブ(板張りの舟)の模型。

(帯広百年記念館: 2)

1 幕別町蝦夷文化考古館(まくべつちょうえぞぼんかこうこかん): 幕別町字千住114-1 電話: 0155-56-4899 火曜日休館(p150)

2 帯広百年記念館(おびひろひゃくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館

「チブ」に乗ってみよう ... 上士幌町・東泉園での体験

上士幌町の東泉園には、上士幌ウタリ文化伝承保存会の人たちによってつくられた「チブ(丸木舟)」があります。丸太をくりぬくのは大変な作業で、数人が交代で作業にあたったそうです。

毎年秋に東泉園でおこなわれる「マレック(マレク)漁の集い(北海道ウタリ協会上士幌支部)」では、池にうかべたこのチブに乗ることができます(p120)。

チブは、さおや櫂によってあやつるのですが、櫂を使うのはかなり技術がいるため、ここではさおによって動かします。基本的には、舟の先に立ち、さおを池の底につき立てて、ぐっと力をこめることで進めます。

乗ってみると、かなり安定していますが、思いどおりに動かすことは簡単ではありません。

バランスをうまくとりながら、腕だけではなく足腰の力も使ってあやつらないと、変な方に進んでしまい、池に落ちそうになることもあります。



チブにチャレンジする中学生の子ども。(上士幌町・東泉園)



東泉園の位置。上士幌町字上音更。



なかなか思いどおりに進まない。(上士幌町・東泉園)

とても長い歴史をもつ丸木舟 ... 和人をも運んだ「チブ」

アイヌの人に伝わる、舟についての伝説を紹介します(話: 吉田常吉氏〔音更〕『杖のみたま(吉田巖)』より)

「ある時シャマイクル(人のすがたをしたカムイ・伝説の英雄)が、土で舟をつくって海に乗り出して、その舟をくつがえしたり、あるいはこわしたり、おぼれるまねをして苦しそうに泳いでいた。これはアイヌに航海の苦しみを知らせ、舟が大事なものであることを示したのだ。アイヌはこれを見習って、丸木舟をつくった。(一部略、やさしいことばに直してあります)」

アイヌの人々はこうした物語を通して、舟の大切さや舟をあやつる時の心がまえを子どもに伝えたのでしょう。

石狩市の遺跡「石狩紅葉山49号遺跡」では、およそ4千年前の縄文時代の丸木舟(一部)が見つかっています(p93・p87)。

丸木舟はアイヌ文化の時代だけではなく、もっと前の時代から何千年間も(おそらく1万年以上)使われてきました。

江戸時代に入り、和人たちがやって来るようになると、川をわたるための渡し舟として、アイヌの人のチブが利用されました。

あるいは、江戸時代末期に北海道内陸を探検した松浦武四郎たちは、川を下るためにアイヌの人のチブに乗せてもらっています。

さらに、明治時代になって開拓者たちがやって来るようになると、人やもの、農産物などを運びます。十勝川では河口部の大津(豊頃町)から内陸までの間を上り下りし、開拓の始まりを支えました。(p143・p159)

また、アイヌの人による渡し舟は、かなりあとまで川をわたる時の大切な足となっていました。



アイヌの人があやつるチブに乗って、川をのぼる開拓者。(上徳善七が描かせたもの)

(上徳善司氏蔵)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん